

[原著論文：査読付]

日本語複文の新たな分類の試み

史 紀元*

Try of new classification of a Japanese complex sentence

Jiyuan SHI*

Abstract

With the rapid development of globalization, high level talents are needed in today's world. Consequently, many examines have made some corresponding changes.

The JLPT in China nowadays is not only used to test personal ability, but also widely used when it comes to employment, promotion, salary raise, qualifying standards and so on. In order to keep the reliability of those examines as well as design more reasonable examines, the JLPT in 2010 has gradually turned into an examine centered in reading and listening.

However, Japanese education in China still remains the old way of language education. With the influence of mother tongue, as well as our education laws, educational resources and other conditions, the pace of reform is unusually slow.

In order to break this situation and increase the comprehension of Japanese reading, the paper attempts to classify the Japanese complex sentence. The new way breaks away from restrictions of analysis of "section", and increased the analysis of the use of sentences in Japanese education.

一 背景

21世紀に入り、パソコンなどの技術発達により、グローバル化が一段と進み、世界各国の大学に押し寄せる「国際化・グローバル化」の圧力も、ますます激しさを増している。そこには「留学生増」という現象もあちこちに出てきている。

日本は、少子高齢化の影響を最小限に食い止めるため、かつ世界の国々に日本そのものをアピールするために、2度の大きな留学生の取り入れ計画を実施してきた。手始めは1983年の「留学生10万人計画」である。この「留学生10万人計画」とは、21世紀初頭までに当時のフランスと同じ程度の10万人の留学生を日本に受け入れるという計画で、当時の中曽根内閣によって掲げられた（文部省、1986）。因みに留学生10万人受け入れの目標は2003（平成15）年に達成されている。

その後、社会・言語のグローバル化を背景に2007年になると再び留学生受入数拡大の議論がなされるようになる。世界のグローバル化が急激なスピードで進展し、世界各国が優秀な人材を国境を越えて求める中、高等教育の段階から有為な人材をリクルートしていかないと、国際的な頭脳獲得競争に勝てないという認識が日本の中に浸透し、2008（平成20）年に「2020年を目途に留学生を30万人とすることを旨とする」、いわゆる「留学生30万人計画」が策定された。2度目の取り組みである。

二 中国社会における日本語能力試験の地位

グローバル化が進む中、有為な人材育成への需要が拡大され、人材の優劣を判定する各試験や資格も多数生まれてきた。英語関連では、TOEFLテスト、英検、TOEICテストなどがある。日本語関連では日本語能力試験（JLPT）、ビジネス日本語能力テスト（BJT）、実用日本語検定（J. TEST）などがある。その中で、中国人の日本語学習者にとって最も重要で、大きな広がりを見せたのは日本語能力試験である。例えば、日系企業への就職を希望するのであれば、日本語能力試験の1級、2級の資格、現在の制度で言えば、N1、N2の合格証書が必要となっている。

世界各国のデータを見ると、2015年（平成27年）7月に実施された日本国外での日本語能力試験（JLPT）受験者数はTable 1の通りである。これは受験地別の分布であり、受験者の国籍を表したものではない。

この表を見ると、国や地域の中では中国の受験者数

が一番多いことがわかる。実はここ数年、中国のこの数字がずっと世界をリードしている形になっている。

Table 1 2015年7月日本語能力試験受験者数

	N1	N2	N3	N4	N5	合計
日本	24,971	26,788	20,867	9,332	1,634	83,592
韓国	10,838	7,271	5,727	2,117	750	26,703
中国	46,479	48,841	18,681	10,622	8,530	133,153
(中国大陸)	38,523	39,832	10,423	3,736	1,286	93,800
(台湾)	6,811	7,849	7,258	5,933	6,179	34,030
(香港)	1,145	1,160	1,000	953	1,065	5,323
インドネシア	234	822	1,956	1,469	1,552	6,033
カンボジア	40	124	297	254	147	862
ロシア	77	191	177	248	290	983
ドイツ	86	108	98	110	145	547
イギリス	65	112	91	103	111	482
インド	143	534	1,055	1,366	2,698	5,796

日本語能力試験は中国における日本語学習者にとって欠かせないものになっているとも言える。即ち、純粋に日本語能力そのものを測るだけではなく、日本語能力試験の成績や等級レベルは、就職や昇進・昇任などを左右する大きな要因となっているからである。

三 中国人日本語学習者にとって複文理解の難点

1 能力試験の改革から難点の転移

日本語教育のための能力試験の改善に関する調査研究のための協力者会議が、2001（平成13）年に開かれ、国際的な交流が広がる中、日本語学習への関心も高まってきて、学習者の数も増加したとみられている。それに伴い、日本語学習の目的や需要も多様化の様相を呈してきたと言われている。

そこで、その変化に対応し、一層の充実・改善を図ることを目的に、留学希望者だけでなく、就職や日本語能力の測定、コミュニケーション能力の向上などの様々な面に応用できるように、様々な社会的・文化的な要素も含めて、より柔軟に運用できる日本語能力の修得へと制度改革が求められた。

その結果、2010（平成22）年に日本国際教育支援協会と国際交流基金が、日本語能力試験をN1からN5までの段階に変更する制度及びレベル改革を行った。

即ち、以前の4つのレベルに呼応する4項目の試験から5つのレベルに呼応する3項目の試験に変更し、合格判定の基準も併せて変更があった（Table 2）。

変更以前は総合点数で合否の判定を行っていた。例えば、1級試験の場合、総合点が全得点の70%を超えると合格と判定されていたが、新試験では、総合得点と各区分の得点の二つで合否判定を行うこととなった（新しい日本語能力試験ガイドブック、6）。つまり、総合得点が合格に必要な点（合格点）以上であることと、各区分の得点が、区分ごとに設けられた合格に必要な点（基準点）以上であることの二つが必要となった。これは、ある分野に偏らないバランスを持った日本語能力が新たに求められてきたことを意味する。

さらに、項目そのものも「文字・語彙、文法、聴解、読解」の4つから「言語知識（文字・語彙・文法）、読解、聴解」の3つに変更され、暗記すれば容易に解答できる「文字・語彙・文法」を減らし、読解部分の割合を大きくした。

Table 2 新旧日本語能力試験対照表

新試験				旧試験				
級	項目	時間	得点		級	項目	時間	得点
N1	言語知識 (文字・語彙・ 文法)・読解 聴解	110 分	180	➡	一級	文字・語彙 聴解・文法	45 分 45 分 90 分	400
	合計	170 分				合計	180 分	
N2	言語知識 (文字・語彙・ 文法)・読解 聴解	105 分	180	➡	二級	文字・語彙 聴解・文法	35 分 40 分 70 分	400
	合計	155 分				合計	145 分	
N3	言語知識 (文字・語彙)	30 分	180	➡	無し			
	言語知識 (文法)・読解	70 分						
	聴解	40 分						
	合計	140 分						
N4	言語知識 (文字・語彙)	30 分	180	➡	三級	文字・語彙 聴解・文法	35 分 35 分 70 分	400
	言語知識 (文法)・読解	60 分				合計	140 分	
	聴解	35 分						
	合計	125 分						
N5	言語知識 (文字・語彙)	25 分	180	➡	四級	文字・語彙 聴解・文法	25 分 25 分 50 分	400
	言語知識 (文法)・読解	50 分				合計	100 分	
	聴解	30 分						
	合計	105 分						

2 中国人学習者にとっての読解

中国語の文型は、SOV型の日本語と違ってSVO型で、文章を作るときに、主語（Subject）- 動詞（Verb）- 目的語（Object）の語順をとる。その影響で、多くの中国人学習者は日本語を勉強しているとき、或いは中国語に訳すとき、前方から順番で翻訳するという習慣がある。多くの学習者に共通して「一つ一つの単語はわかるけど、文としての意味が分からない」という想いを抱くことがある。そういう習慣の違いを持つ中国人日本語学習者が、複雑な長文、特に複文に出会うと、殆どの場合、お手上げの状態になると言える。日本語能力試験の制度改革に皆が難しくなったと感ずるのも無理ないことである。

しかも、中国における日本語教育は文法中心の考え方が主流であった。これまで多くの高校はずっと「基礎文法+能力試験」を中心に教育を行っていた。以前の日本語能力試験は、文法学習を重視することによって合格率を高めることができた。殆どの日本語教師は、文法説明に力を入れているし、学生も必死に文法の勉強をしてきた。

新試験の運用後も、この様な旧態依然とした教育法は学習者から新試験の合格を遠ざける結果となった。現在も殆どの教材は、依然として文法練習或いは会話練習を中心に作られており、読解問題の練習に対応した仕様とはなっていない。そもそも読解訓練に使える資料や情報が少ないのが現実であり、複合的に合格への道を閉ざしている。

こうして、母語の影響や、大学生の学力低下、スマートフォンなどの画期的な電子製品への興味津々などの影響の下、このまま文法重視の教育を行っていくと、新試験の合格はもちろんのこと、学生の日本語能力向上は望めない。

3 従来の日本の研究成果の応用の難点

日本国内の国語教育の中では複文の理解に関する多くの研究成果が示されている。その多くは日本語の複文を主節と従節に分けた分析を行っている。

三上章（1999）は、「主語廃止論」で有名であるが、単に「日本語に主語はない」と言明するだけなら、それほど画期的なことではないが、三上は日本語のシンタクスを明らかにするには何が必要かを考え、主語を否定し、主題の重要性を強調し、現在「複文」と呼ばれている構文の研究をシンタクスの中心にすえた。また、複文を単式と複式（軟式・硬式）に分類し、内部要素と外部で定義される要素との関係の可能性の大小

を反映させた。

南不二男(1974, 1993)は、日本語の文の構造は階層的に捉えられるとし、それには描叙・判断・提出・表出の4つの段階があると述べた。そのような段階を認める根拠は、従属節における述語部分と述語以外の部分との共起関係に相違がみられることにあった。そして、述語部分の形態論的なカテゴリーが豊かであるか否かということと述語以外の部分の要素が豊かであるかないかという双方の特徴に基づいて、4つの段階に区別され、述語以外の部分は、述語に直接かかる名詞句や副詞句などのことであるとした。

仁田義雄(1993)は「文の中核となる主節と主節に従属する従節とがある。従節には〈副詞節〉〈中止節〉〈条件節〉〈接続節〉、〈時間関係節〉〈連帯規定節〉などがある。」と述べている。

益岡隆志(1997)では、従属節の類型として「名詞節」「連体(修飾)節」「連用(修飾)節」「並列節」の4つをあげている。ただ、それぞれの節の特徴については述べられているものの、4つの節が相互にどのような関係にあるのかが記されていない。

これらの研究結果は、中国人の日本語学習者にとって理解するには時間がかかるし、把握まではとても辿り着かないであろう。その原因は以下のことが考えられる。

まず、節というのは文節という用語と勘違いされやすい。今までの日本語表現を階層的に分けると、〈文章⇒文⇒節⇒文節⇒単語⇒文字・音素〉というものが多かった。ざっと見ると、「節」と「文節」があって、理解に戸惑う学生が多いのではないと思う。自発的に、主体的に思考することが苦手な現代の若者には、ややこしいと感じさせてしまうであろう。

二つ目は、節には連体修飾節と連用修飾節があって、一つの独立した文と見なしていることである。中国人学習者から見ると、これはさらに分かりにくく感じる。中国語には「定語」「状語」¹⁾という相当する文法用語があり、文ではないと規定している。

そういう状況の中、中国人学習者の勉強の便宜を図るため、読解の長文を理解しやすくするため、本論では複文分類の再検討を試みた。

四 新たな分類の試み

日本語学習者が長文をもっと理解しやすくするため、以下の分類を新たにしてみた。

1 複文の定義

定義として、述語が内在している連体修飾語と連用修飾語を除いて、2つ以上の述語部分を持つ文を複文と呼ぶことにした。

- 1) 隣に座っている人は、まだ怒っているように、
一言も言わずに腕を組んでじっとしている。

下線の部分は連体修飾語と連用修飾語の実例で、文の述語にはならない。ここでいう述語というのは形容詞、形容動詞、動詞、名詞+だ(です/である)の4種類から構成されるものとする。連用修飾語は普通、「用言を含む文節にかかる修飾語」と定義するが、本論では、〈副詞〉、〈後ろの動詞と修飾関係のある形容詞の連用形「〜く」・形容動詞の連用形「〜に」〉、〈助詞(接続助詞以外)で終わる文節〉、〈助動詞で用言を修飾する〉の四つの場合はすべて連用修飾語とみることにする。

- 2) あの人**は**細長い道**に**入った。(単文)
- 3) あの人**は**右**に**回って、よそ道**に**入った。(複文)
また、次の重文も複文の一つとして見ることにした。
- 4) 風は強く**て**、雨もひど**い**。

一方、日本語教育でよく使われている文型(日本語文型辞典に参照)も取り入れて同時に検討する。

文型については、本文では2つの分類法を活用している。一つは文の中の位置によって、文末文型と文中文型に分ける方法である。さらに文中文型は、文型前の部分と後ろの部分は単語か分句かによって、単語関係文型と文関係文型に分けることにした。

- 5) 老後のことを考えると、不安は募る一方だ。(文末文型)
- 6) 駅前で交通事故があった折、たまたま僕はそこに居合わせた。(文中文型)
- 7) 社長はもちろん、役員一同が反対だ。(単語関係文型)
- 8) 生きている限り、先生から受けた御恩を忘れることはありません。(文関係文型)

2 分句とは

本論では複文の中に述語を含んでいる部分は節と叫ばないで、分句と呼ぶことにする。分句を見分けるには述語の連用形、接続助詞、文中の文関係文型の3つを印として分析する。勿論、伝統的な主節と従節という分け方はしない。

そうすると、日本語の言語表現の階層構造を以下のように分ける。

- 〈文章⇒文⇒分句⇒文節⇒単語⇒文字・音素〉
複文の例は以下のとおりである。

- 9) 彼はその棒を机の上に置き、黙って出ていった。
(述語の連用形)
- 10) 春になると、花が咲く。(接続助詞)
- 11) こうなった以上は、もう他に方法はない。(文中の文型)

3 複文の分類

複文に関して新たに定義したが、具体的に複文にはどんなものがあるのか、その分類はどうなっているかを例を挙げて説明する。複文の分類は主に機能的な役割を基に行った。

3-1 時間関係複文

こちらの分句と分句の間に時間軸に沿って、前後かあるいは同時に事象が発生することが特徴的である。

- 12) 立ち上がったとたん、眩暈がして倒れてしまった。
- 13) その用事が終わり次第、そちらにお伺いします。

3-2 原因関係複文

これらの文は前には原因、理由を述べ、後ろに結果が出ることは多いが、前後逆になる場合もありうる。

- 14) 近くにスーパーができたおかげで、生活が便利になった。
- 15) 今日はとても暑くて、体が時々だるく感じる。

3-3 結果関係複文

重要な着目点は結果にある場合で、一般には驚いた情報が伴っている。

- 16) 友達に電話したところ、引っ越していたことが分かった。
- 17) 友達は酒に酔って人を殴った挙句、捕まった。

3-4 順接関係複文

これらの文は自然と次の話を引き出すことが特徴で、述語の連用形、接続助詞「て」がよく使われている。

- 18) いろいろ本を読み、心が落ち着いてきた。
- 19) お碗を棚に置いて、出かけた。

3-5 逆接関係複文

タイトルの通り、前の分句と後ろの分句は逆接関係となり、一部の文には「文句、非難、嫌がる」などの感情が入っている。

- 20) 勉強しなかったわりには、いい成績だった。
- 21) 彼女は中学生のくせして、もう化粧している。

3-6 並列関係複文

こちらは旧い分け方では重文と呼ばれたパターンである。よく並列の役割を果たす接続助詞を利用することが特徴的である。

- 22) あのリングは大きくて、赤い。

- 23) 性格もいいし、顔もきれい。

3-7 条件関係複文

これらの文は仮定条件や既定条件を表すものである。

- 24) 問題を解いてからでなければ、解答を見てはいけません。
- 25) 彼はテレビゲームを始めたが最後、いつも朝までやり続ける。

3-8 様態関係複文

主に様子や状態を表す複文である。

- 26) 彼は座ったきり動こうとしない。
- 27) 私たちは助け合いつつ、暮らしている。

3-9 範囲関係複文

限定の意味合いがあり、物事の限界や範囲を説明するパターンとなる。

- 28) 両親は元気でいる限り、帰国はしないつもりだ。
- 29) 君はやめない限り、俺も続ける。

3-10 目的関係複文

ある目的に駆使されて、いろいろな動きが見えてくるパターンである。

- 30) 彼は、お金を儲けんがため、ずいぶんひどいことをやってきた。
- 31) 資金を回すため、銀行へ何度も訪ねてきた。

五 終わりに

社会発展とともに、電腦（パソコン）がだんだんと人間の脳に取って替わろうとしている。そして、多くの仕事が簡易化されている。また、多くの若者は次第に便利な生活に慣らされ、本を持ち歩くことも苦痛になってきているし、一冊の本を読破することも敬遠する傾向にある。そうすると学生時代の楽しみや本来の学生の本分がなくなるに違いない。そのためそうさせない日本語能力試験の改革は大いに歓迎である。

しかしながら、こういう現況の中、どのように日本語を簡単明瞭に学習者たちに伝えるかということは非常に重要であり、この時代の若者のために、旧態依然とした教育法を改革する必要性があるのではないかと思う。

注

- 1) 中国語には「定語」と「状語」がある。日本語の「連体修飾語」と「連用修飾語」と相当するものである。でも、中に述語を含んでいても、連体詞や副詞のように処理され、日本語の「連体修飾語」と「連用修飾語」とは違う。

参考文献

- 池田伸子 (2015) 「学習者の多様性に対応できる日本語教育とは」『言葉・文化・コミュニケーション』第7号115-119.
- 文部省 (1986) 『21世紀への留学生政策』文部省学術国際局留学生課
- 三上章 (1999) 『現代語法序説』くろしお出版
- 国際交流基金 (2011) 『海外の日本語教育の現状日本語教育機関調査・2009 年』凡人社
- 国際交流基金, 日本国際教育支援協会 (2011) 『日本語能力試験結果の概要』凡人社
- 文部科学 教育通信 No. 318 2013年 6月24日号『シリーズ・海外の日本語教育事情 (14)』P. 20-21
- 村木新次郎 (2007) 「日本語の節の類型」『同志社女子大学 学術研究年報』第58巻9-17.
- 宮部真由美 (2017) 『現代日本語の条件を表す複文の研究』(晃洋書房)
- 原沢伊都夫 (2016) 『考えて, 解いて, 学ぶ 日本語教育の文法』(スリーエーネットワーク)
- グループジャマシイ (1998) 『日本語文型辞典』くろしお出版
- ウィキペディア <https://ja.wikipedia.org/> 日本語能力試験関与
- 日本語能力試験 <http://www.jlpt.jp/index.html>

Received date 2017年5月29日

Accepted date 2017年7月27日